

ザカリア預言書

ザカリアはいわゆる「小預言者」十二人の中、順番から言えば一番目の人であるが、内容から言えば一番で、彼をイザヤと同列におく人も少なくない。

彼の父はバラキアと言つたが、もちろんキリストが仰せられたあの聖殿と祭壇との間で殺されたバラキア（マテオ二三・三五）とは別人である。また彼の祖父は、ゾロバベルと共にバビロンの囚われから帰つた司祭達の中に数えられている（尼一二・四）。

ザカリアはアゲオと同時代の人で、後者と同じく聖殿の建築工事を速かに進めるよう勧告した。

第一章

ザカリア天主に立帰ることを民に勧め、己が見し馬、角、鍛冶屋の幻象につき述ぶ

二 ダリウス王の、二年第八月（ねんぱうがつ）、^{（おう）}主の御言、アッドの子バラキアのその
三 また子なる、預言者ザカリアに下れり、曰く、主は汝等の父祖（じゆそ）に対し、
怒りに怒りて在す。^{（いま）}三万軍の主かく云い給う、と汝彼等に云うべし、万
軍の主云う、汝等我に立ち歸れ、万軍の主云う、さらば我もまた汝等に
一参考。

第一章 (1)アゲ

オに最初の予言
が下つてから二
カ月後（基一・

立たち帰かえらん。四なんじら汝等ふその父祖ふその如ことくなるなかれ、彼等かれらに前の預言者等よげんしゃたちは呼ば
わりて云いえり、万軍ばんぐんの主しゆかく云い給たもう、汝等なんじらその惡しき道みちと邪よこしまなる思念おもいと
を離はなれて立ち帰かえれ、と。されど彼等かれらは聽きかず、我われを顧かえりみざりき、主しゆしか云い
う。五なんじら汝等ふその父祖ふそは何處いすこにある。²⁾また預言者等恒ひつねに生いくべけんや。³⁾
然しなれどもわが下僕しもべなる預言者等よげんしゃたちに、我われの託たくしたるわが言ことばとわが法のりとは、
汝等なんじらの父祖ふそに当あたりたるにあらずや。されば彼等かれら立帰たちかえりて云いえり、万軍ばんぐんの主しゆ
我等わがれらの道みちに応おうじ、我等わがれらの企図たくらみに応おうじて、我等わがれらになさんと思おもい給たまいし如ごとく、
我等わがれらになし給たまえり、と。七たダリウスの二年ねん、サバト4)と称よばるる第十一月がつ

の二十四日か、主みことの御言みことば、アッドの子こバラキアのそのまた子こなる、預言者よげんしゃザカ
リアに下くだれり、曰いわく、八わ我夜見よるみしに、看みよ、一人の男ひとの一頭とうの赤馬あかうまに乗のれ
るありて、深ふかき谷底たにそこなる桃金娘とうじんじょうの樹きの間に立あだたてるが、その後うしろには、赤馬あかうま、
斑馬ぶちうま、白馬居しろうまおりき。九わが我われ、「わが主しゆよ、是等これらは何なるか」^{これに}と云いしに、わが
内部うちにありて語かたる天使てんし、我われに云いけるは、我われ、是等これらが何なるかを、汝なんじに

2)彼らに関する予言はバビロンで成就して、彼らは今異郷の地に埋められている
3)預言者達は死んでも、彼らの言は依然有効。⁴⁾サバトの月は我々の暦の二月半ばかり二月半ばまでに相当。⁵⁾ユダヤ人たちはこれを天主の選民の守護者聖ミ

示さん、と。一〇。桃金娘の樹の間に立てる人、答えて云ひけらく、是等は地

を遍く経歴らしめんとて、主の遣し給える者なり、と。一一。彼等桃金娘の樹

の間に立てる主の使に答えて云ひけるは、我等地を遍く経歴りたるに、視

よ、全地は人住みて穩かなり、と。一二。主の使答えて云ひけらく、万軍の主

よ、汝が怒りを注ぎ給えるイエルサレムとユダの諸邑とを、憐まんとし給

わざるは何時までぞや。こは既に七十年なり、と。一三。主乃ち、わが内部

にありて語る天使に、善き言ことば慰藉となる言を答え給いぬ。一四。わが内部に

ありて語る天使、我に云ひけるは、汝叫びて云え、万軍の主かく云い給

う、我大いに熱中してイエルサレムとシオンとに焦れ居り、一五。勢盛なる

國々の民に対して大なる忿怒に燃ゆ。そは我少しく怒りしに、彼等悪を助

長したればなり。一六。この故に主かく云い給う、我憐みてイエルサレムに帰

らん。万軍の主云い給う、わが家その中に建てられ、測量繩イエルサレムに張らるべし。一七。汝なお、叫びて云え、万軍の主かく云い給う、わが諸市

カエルと見な

している。と

にかくイスラ

エルの配慮を

委ねられてい

る天使である

ことは確か。

八〇。西紀前五八

八年から起算

するから、五

八年。七十年

後にはイエレ

ミアの予言

(耶二五・一)

一〇の通り復

興が成るはず

一一八

二二〇

にはまた善き物溢るべし、主またシオンを慰め、またイエルサレムを選えらび給わん、と。一八我目をあげて見しに、視よ、四つの角⁷⁾あり。一九我、わが内部にありて語る天使に、是等は何なるか、と云いしに、彼、我に云いけるは、是等はユダとイスラエルとイエルサレムとを、風のまにまに散らしやりたる角なり、と。二〇折しも主我に四人の鍛冶匠⁸⁾を示し給いしかば、二一我、是等は何をなさんとて来れるぞ、と云いしに、彼告げて曰いけるは、是等はユダを各人風のまにまに散らしやりて、彼等の誰にもその頭⁹⁾を抬ぐことなからしめし角なれど、是等が来れるは、これを脅¹⁰⁾やかし、かのユダの地に対して角¹¹⁾をあげ、そを散らさんと囮りたる諸国民の角を挫かん為なり、と。

⁷⁾角は力や強さを表わす。ダニエル書では敵の王たちの象どりとは、天主がユダの敵の軍勢を滅ぼすためお使いになる有力者

第二章

イエルサレムの町の回復

三一

二我また眼をあげて見しに、視よ、一人の男ありて、測量繩を手に持てり。

三汝、何処

第二章

1) 下

僕。 1) かつ

てイスラエル

人の前に立つ

てエジプトか

ら連れ出した

火の柱のよう

に、天主が御

国を護り給う

3) バビロン。

4) 天使。この

天使はイスラ

エルが誓を得

されるのを見

るために遣わ

された。

に行くや、と我云いしに、彼、我に云いけるは、我イエルサレムを測量りて、その幅幾何なるか、その長さ幾何なるかを、見んとするなり、と。

三 折しも視よ、我の内部にありて語りし天使出で行きしが、今一位の天使

之を出で迎え、四之に云いけるは、馳せ行きて、その若者わかものに告げて云え、

イエルサレムは、その中に人と畜との多きあまり、垣を設けずして住むに

至るべし。五主云い給う、我その周囲にては火の垣となり、²⁾その中にて

は光榮を顯さん。六主云い給う、いざ、いざ、汝等北の地なんじらきたちより逃げ来れ、

そは我汝等われなんじら天の四方に散らしたればなり、主爾言う。セイざ、娘バビロ

ンの許もとに居るシオンよ、逃げ来れ。八それ、万軍の主かく云い給う、光榮

の為、彼汝等かれなんじらより掠奪かすめとりたる國々の民たみの許に、我われ⁴⁾を遣し給えり、蓋し汝

等に触るる者は、わが眼の球めに触るるが故なり。九実にも視よ、我彼等に

む向かいてわが手てをあぐ、彼等かれらは己おのれに仕えし者等ものどもの獲物えものとならん、かくて汝なんじ

等、万軍の主が我われを遣し給いことを知るに至るべし。一娘シオンよ、頌ほめ

一〇

歌唱して喜び樂しめ、そは視よ、我來りて汝の中に住まわんとすればなり、と主云い給う。一その日には⁵⁾多くの國民主に附きて、わが民となれ、⁶⁾我汝の中に住まわん、⁷⁾かくて汝、万軍の主が我を汝の許に遣し給えることを知るに至るべし。二主聖とせられたる地の中にて、ユダを己が分となし、またイエルサレムを選び給わん。三凡て肉ある者は主の御面前に黙せよかし、そは主その聖なる御住居を、立ち出で給いたればなり。

第三章

メシアの前表なる大司祭イエズスについての幻象

一 主、大司祭イエズスが主の使¹⁾の前に立ち、サタンがその右に立ちてこれに敵わんとするを、我に示し給いしが、²⁾主サタンに曰³⁾いけらく、サタンよ、主汝を責むべし、實にイエルサレムを選びし主汝を責むべし。是は²⁾火の中より取り出したる燃木にあらずや、と。三イエズス汚⁴⁾

5) メシアの時代には。
6) これはその時まではただユデア人だけの特權であつた。出一九・五など参照。
7) 約一・一四參照。

第三章 旧約の教会の守護者聖ミカエル。
2) 大司祭。

れたる衣を着て、³⁾ 天使の面前に立ちおりしに、⁴⁾ こは言を發して
己が前に立てる者等に語り、「彼より汚れたる衣を取り去れ」と
云い、また彼に向かいて、「視よ、我、汝の不義を汝より取り除のを
きて、着換の衣を汝に着せたり」と云えり。⁵⁾ 彼また云いけらく、
潔き冠をその頭に被らせよ、と。乃ち潔き冠をその頭に被らせ、
衣をこれに着せたり。主の使はなおそこに立ちおれり。⁶⁾ 主の使、
イエズスに保証して云いけるは、⁷⁾ 万軍の主かく云い給う、汝も
しわが道を歩み、わが命を守らば、またわが家を裁き、わが廷を
守るべし。なお我今ここに立てる者等の中より、⁸⁾ 共に歩むべき
者⁴⁾ を汝に与えん。⁹⁾ 大司祭イエズスよ、汝及び汝の前に居る汝
の友等⁵⁾ 聽けかし、それ、彼等は前表⁶⁾ となる人々なり。實にも
視よ、我わが下僕なる裔⁷⁾ を來らしめん。視よ、我がイエズス
の前に据えたる石⁸⁾ を、この一つの石の上に七つ⁹⁾ の眼あり。

³⁾ 汚れた衣服をぬがせて晴着を着せるのは、大司祭の罪を除き、恩寵を与える象どり。

4) 天使。—5) 即ち汝の補佐役、顧問たち。

6) 将来のメシアの御國の司祭職の前表。

7) ダヴィド家の最もすぐれた子孫であるメシア。—8) まず第一にはユデアの神政国。更にはメシアの御国。
9) 七は完全数。故にその上に絶えず天主の御加護があるとの意。

視よ、我、その彫刻をなさんとす、万軍の主爾云うなり。我そ
一〇 の地^ち₁₀₎ の不義を、一日にして除き去らん。一〇万軍の主云い給
う、その日には、人各々葡萄の樹の下、無花果の樹の下にその
友を招ぶべし。¹¹⁾

第四章

黃金の燭台と、二本の橄欖樹との幻

一 わが内部にありて語れる天使、再び来りて、恰も人を睡眠より起^{おこ}すが如く、我を呼び
二 起しけり。ニ彼我に、「汝何をか見る」と云いしかば、我云いけるは、我見たるに、視よ、
総金造りの燭台一基^{しそくたいひとつ}ありて、その頭部に燈^{ともしづ}あり、それには七つの燈皿^{ひぎら}ありて、その頭部^{いただき}に橄欖^{かんらん}の樹二本^{ほん}あり、一
にあるこれらの燈皿^{ひぎら}に対して七本の管^{くわん}あり。三またそのほどりに橄欖^{かんらん}の樹二本^{ほん}あり、一
本は燈の右に、一本はその左にあるなり。四我言を發し、わが内部にありて語る天使に
謂いて曰く、わが主よ、是等は何なるか、と。五わが内部にありて語る天使、我に答え
て、汝^{なんじ}これらの何なるかを知らずや、と云いしかば、我は、わが主よ、知らず、と云え

10) 厳密な意味ではパレスチナ。次いで全地。即ち天主の民に加わるべきすべての国人。——王上四・二五。米四・四参照。

第四章

①最大

の障碍。

—2か

なめ石。—3ま

たは「彼は聖殿

の起工も竣工も

めでたくなしと

ぐべし」。ヘブ

レオ語本は「こ

れに恵みあれ恵

みあれと叫びは

やしつつ（石を

据えん）。

4) 聖殿の起工式

の時にするよう

にささやかなこ

とをする日。

り。六彼また言を發して我に云えり、曰く、主のゾロバベルに曰う御言
は次の如し、曰く、軍勢によらず力によらずして、わが靈によれ、万軍
の主しか云う。セゾロバベルの前にある大山^{おおやま}リよ、汝は何者ぞ。汝は平
地とならん、彼は主要石^{いし}₂₎を曳き出して、その美に美を加うべし。³⁾八主
の御言また我に下れり、曰く、九ゾロバベルの手、この家の基礎を据え
たり、その手またこれを建て終えん、かくて汝等万軍の主が我を汝等の
許に遣し給えることを知るに至るべし。一〇そもそも誰か小なる日⁴⁾を輕
んじたる。彼等は喜びて、ゾロバベルの手にある錫の錘を見ん。是等は
遍く全地を馳せ廻る主の七つの御目なり、と。二ここにおいて我言を發
して彼に、「燭台の右とその左とにある、この一本の橄欖の樹は何なる
か」と云い、二再び言を發して彼に、「中に金の管ある、金の二つの嘴
の傍にある、かの一枝の橄欖は何なるか」と云いしに、二彼我に向かい
て、「汝、これらの何なるかを知らずや」と云いしかば、我「わが主よ、

「知らず」と云えり。一四「彼乃ち云いけるは、是等は
油の二人の子⁵⁾にして、全地を統治す君に侍く者
なり、と。

第五章

飛ぶ巻物と、樹の中の女との幻

第五章

二一
一我再び目をあげて見しに、視よ、一つの飛べる巻物あり。
二彼我に汝何を
か見る、と云いしかば、我云いけらく、我、飛ぶ巻物を見る。その長さは二
十クビト¹⁾にして、その幅は十クビトなり、と。三彼我に云いけるは、これ
は出でて全地の面に及ぶ呪詛なり。それ、盜む者は悉く、そこに記されたる
四如く裁かれ、誓う者はいざれも皆、同じく之によりて裁かるべし。四万軍の
主云い給う、我之を出さん、そは盜む者の家と、わが名によりて偽り誓う者
の家とに至り、その家の中に留まりて、之をその木その石諸共、焼き尽すべ
し、と。五わが内部にありて語れる天使、出で來りて我に云いけるは、汝目

⁵⁾ ヴルガタ原語 filii olei 世俗的権力者と
して注油されたゾロバベルと、宗教的権力
者として注油されたイエズス（イエホーア
ニア）。

トは○。
一クビ
五二五メ
ートルに
相当。

をあげて、この出で来るものの何なるかを見よ、と。六そは
 何ぞやと、我云いしに、彼云いけらく、この出で来るものは
 槵²⁾なり、と。また云いけらく、彼等の³⁾状⁴⁾は全地にわた
 りて是の如し、と。視よ、鉛の円蓋⁵⁾除かれたり、視よ、
 槵の中には一人の女⁶⁾坐せり。八彼、「これは不敬なり」と
 云うや、かの女を桵の中に投げ入れ、その⁷⁾口に鉛の蓋を被
 せたり。九我また目をあげて見しに、視よ、二人の女⁸⁾出で
 きたりしが、その翼には風を孕めり、即ち彼等には鳶の翼の如
 き翼⁹⁾ありしなり。彼等その桵を天地の間に持ちあげたり。
 一〇時に我、わが内部にありて語る天使に、「かの女等は桵を
 何処に携えゆくや」と云いしに、ニ彼我に云いけるは、その
 為センナールの地¹⁰⁾に家を建て、そこにおいて之を、その台¹¹⁾
 の上に据え置かんとてなり、と。

2) ヘブレオ語本「エファ」。

一エファは五八リツトル。

3) 前記三、四節の罪人達の

4) ヴルガタ原語 oculus

「目」。ヘブレオ語の言い方
で「さま」の意。——5) 一エ

ニア桵のふた。——6) 不貞な
フア桵のふた。——7) 不貞な
イスラエルはしばしば姦通
した女に警えられる。

7) 桵の。——8) 御民の中の不
義を除くために天主が手先
としてお用いになるすべて
の人を象徴する。——9) セン
ナールは、天主に反対する
すべての勢力の代表と考え
られるバビロンと同じ。

第六章

四輪の車の幻——王にして司祭なるメシア

一 我またもや、目をあげて見しに、視よ、四輪の車(リヨウくるま)
 二つの山の中央より出で来りしが、その山は青銅の
 山(ヤマ)なりき。二第一の車には赤馬、第一の車には黒馬、
 三第三の車には白馬、第四の車には強くして斑ある馬
 附けり。四我言を發し、わが内部にありて語る天使に
 「わが主よ、是等は何なるか」と云いしに、五天使答
 えて我に云いけるは、是等は天の四つの風にして、出
 でて全地の支配者の御前に現れんとするなり。六黒馬
 の附きたるは北の地として出で行き、白きはその後に
 従いて出で、斑なるは南の地へと出で行き、セまた最
 も強きは出で行きて、遍く全地を馳せ廻らんとせり。

第六章 ①出て来た戦車は天主に敵
 対するすべての勢力の鎮圧を意味す
 る。——②決して破れることのない堅
 固な場所。——③言い伝えによればこ
 の説明は次の如し。赤馬は、アッシ
 リア人とバビロン人とを意味し、北
 の地即ちバビロンをさしてゆく（本
 二・六）黒馬とはメド・ペルシャ人
 で、白馬とは常勝のマケドニア人、
 また強きぶち馬とはローマ人をさ
 す。——④風は聖書の中でしばしば天
 主の下僕とか道具とか言われている
 （詩一〇四・四。一四八・八）。四
 つという数は全地を示す。

彼、「往きて地を遍く経歴れ」と曰いしかば、彼等地を遍く経歴りたり。八彼我を呼び、我に語りて云いけらく、視よ、北の地さして出で行くものは、北の地にてわが忿怒を宥めたり。⁵⁾九主の御言また我に下れり、曰く、一〇汝かの擒え移されたる者等の中、ホルダイ、トビア、及びイダヤより、取れよかし。即ちその日には汝バビロンより來りしソフォニアの子ヨシアの家に入り、二金銀を取りて⁶⁾冠を作り、ヨセデクの子なる大司祭イエズスの頭に戴かせ、三これに告げて云うべし、万軍の主かく云い給う、曰く、視よ、その名を裔という人あり。⁷⁾これは彼の下より⁸⁾生い出でて、主のために聖殿を建てん。三實に彼は主のために聖殿を築き、⁹⁾光榮を佩び、その玉座に即きて治め、その玉座にありて司祭となるべし。この

⁵⁾天主の民にあれほど敵対していた北の勢力を滅ぼして。——⁶⁾バビロンに残っているユデア人達のもとからイエルサレムへの奉納物を携えた三人の男が遣わされた。

7)本三・八参照。旧約原典アラマン語意訳には「見よ、その名をメシアといふ人を」とある。——⁸⁾自分の前表である大司祭の代りに。——⁹⁾本四・七一一〇では聖殿建立はゾロバベルのすることとされていて、ここでは裔即ちメシアのすることとなつてゐるから、ここでは司祭王メシアが建てるべき靈的聖殿をさし、その聖殿建立には、メシアに救われた人々が参加するだろう。一五節参照。

一四

兩者^{りょうしや}の間^{あいだ}には平和^{へいわ}の議^{かたらい}あらん。^{一四}またその冠^{かんむり}は、ヘレム^ム、¹¹⁾トビア、イダヤ、及びソフオニアの子なるヘムよりの奉納物^{ささげもの}にして、主^{じゅ}の聖殿^{せいでん}に納^{おさ}めて、記念^{かたみ}となすべし。¹²⁾

遠方^{えんぱう}にある者等^{ものども}、來りて主^{じゅ}の聖殿^{せいでん}において建築^{けんちく}に當たらん、¹³⁾かくて汝等^{なんじら}、万軍^{ほんぐん}の主^{じゅ}が我^{われ}を汝等^{なんじら}の許^{もと}に遣^こし給^{たま}いしことを知^しるに至^{いた}るべし。もし汝等^{なんじらまこと}寔^{しゆ}に主^{じゅ}汝等^{なんじら}の天主^{てんしゅ}の御^み声^{こゑ}に聽^き従^{したが}わんか、かくの如^{ごと}くなるべきなり。

第七章

断食につきての伺い

一ダリウス王^{おう}の四年のことなりき、第九月^{だい}、即ちカスレウ

月^{つき}の四日^かに至りて、主^{じゅ}の御言^{みことば}またザカリアに下れり。

ニ サラサル、ロゴンメレク、及びこれと共にありし人々^{ひとびと}、天主^{てんしゅ}の家^{いえ}に人^{ひと}を派^{つか}して、主^{じゅ}の御面前^{みまえ}に祈願^{きがん}をこめたり、

¹⁰⁾メシアのイエズスと大司祭のイエズスとは、後者がメシアの前表である点で一致している。

¹¹⁾本章一〇節のホルダイと同じ

¹²⁾聖殿に奉納物としてかけられた冠は、それが象徴するメシアをいつも思い出させるため。

¹³⁾ここに予言されているのは異教徒の改宗。

三 そは万軍の主の家の司祭等、及び預言者等に伺いを立てしめんため
 なりき、曰く、我既に多年の間なし来れる如く、なお第五月に泣き且
 身を清めざるべからざるか、と。²⁾ 四時に万軍の主の御言、我に下れり、
 曰く、五國のすべての民、及び司祭等に告げて云え、汝等この七十年
 の間、^{あいだ} 第五月と第七月とに断食して嘆き悲しみたる時、果たしてわが
 為に断食したるか。³⁾ 六汝等、食い且飲みし時は、これ、己が為に食
 い、己が為に飲みしにあらずや。七こは、イエルサレムにもその周囲
 の諸邑にもなお人住みて、その富みたりし時、南方にも平地にも住む
 人ありし時、主が以前の預言者等の手を経て告げ給いし御言にあらず
 や。八主の御言、またザカリアに下れり、曰く、万軍の主かく云い
 給う、九曰く、汝等、眞の裁判を行い、各人その同胞に對して慈愛と
 憐憫とをかけよ。一〇寡婦や孤児、旅人や貧しき者を虐ぐるなけれ、何
 人もその同胞に對して悪しき事を心に企むべからず、と。⁵⁾ 一一然るに

²⁾ 神殿荒廃のため
 に定められた苦行
 の日は今後もまだ
 守らなければなら
 ないか。王下二五
 • 八以下参照。

³⁾ 天主は断食の際
 正しい心がけの欠
 けていることを咎
 め給う。一四断食
 よりも重要なのは
 天主が予言者達に
 よつて常にすすめ
 下のこと。⁵⁾ 出
 二二・二二。賽一
 • 二三。耶五・二
 八。

彼等は意を注めんともせず、離去らんとてその肩を向け、聴かざらんとてその耳を塞ぎ、三万軍の主がその御靈により以前の預言者等の手を経て伝え給いし律法と御言とに聽き従わざらんとて、その心を金剛石の如くになしたりき。さればこそ大なる憤怒、万軍の主より発したるなれ、と。三果してその告げ給いし如くなりて、彼等聴かざりき。されば彼等叫ぶとも、我聽かじ、と万軍の主云い給う。一四我彼等をその知らざる諸国に、遍く逐い散せり。その後にはその地、往来する者なきが故に荒れ果てたり。かくして彼等好ましき国を荒野となしたるなり。

第八章

メシアの時代に実現さるべきイエルサレムへの喜ばしき約束

一万軍の主の御言、また我に下れり、曰く、三万軍の主かく云い給う、我大いに熱中してシオンに焦れ、大なる憤怒¹⁾を抱きてこれに焦れたり。三万軍の主かく云い給う、我シオンに帰れり、²⁾イエルサレムの中に住まわん。イエルサレムは真理の都と称えら

第八章 ①その敵に対する怒り。——②天主が都を敵の手に委ね給うたのは、いわばそこを去り給うたようなもの。

れ、万軍の主の山は聖なる山と称ばるべし。四万軍の主かく云い給う、イエ

ルサレムの巷には、老いたる男老いたる女なお住まい居り、いずれの人も齡

高きあまり杖を手にもたん。³⁾五またその都の巷には男の兒女の児満ちて、そ

の巷に遊び戯るべし。六万軍の主かく云い給う、これ、たといその日に當り

てこの民の残存者⁴⁾の目に難しと見ゆとも、⁵⁾豈わが目には難からんや、と

万軍の主云い給う。七万軍の主かく云い給う、視よ、我、日出る国より、ま

た日の入る国より、わが民を救い取りて、八彼等を伴い来らん、彼等乃ちイ

エルサレムの中に住みて、わが民となり、我真理と正義とによりて、彼等の

天主となるべし。九万軍の主かく云い給う、汝等、聖殿を建てん為に万軍の

主の家の基礎を据えし頃に預言者等の口より出でし是等の言を、この頃に至

りて聞く者よ、汝等の手を強くせよかし。一〇それ、かの日の前には、人にも

労銀なく、畜にも労銀なく、出する者にも入る者にも、患難のあまり平安な

かりき。なお、我すべての人を、各々その隣人に敵うに任せたり。ニされど

³⁾早死に

は罪の罰

と思われ

ていた。

4) 戰爭と

捕虜輸送

との後に

帰つて來

た少數の

人々。

5) 以前の

立派な状

態に復興

させると

いう天主

の御約束

の成就。

今は、我この民の残存者を、襄の日の如く、扱わじ、と万軍の主言い給う。

二却つて平安の種子あらん、葡萄の樹は果を結び、地は產物を出し、天は露を降すべし。我この民の残存者をして、是等の物を悉く得しめん。ニユダの家、及びイスラエルの家よ、汝等曾ては異邦人等の中にて呪われたりしかど、我汝等を救うべければ、汝等この度は祝せらるべし。怖るるなけれ、汝等の手を強くせよかし。一四それ、万軍の主かく云い給う、曾て汝等の父祖のわが忿怒を招きし時、我汝等に患難を与えると思ひたりき、と主云い給う。一五しかして我憐めざりしが、かくの如く、この日頃はまた、意を翻して、ユダの家とイエルサレムとに、恩恵を施さんと思えり。怖るるなけれ。一六さて汝等のなすべき事は次の如し、汝等各人その隣人に眞実を語れ、汝等の門にては眞実によりて平和の審判6)を行え。一七汝等誰もその友にに対して、惡しき事を心に企むべからず。また偽りの誓を好むなけれ。蓋は是等はすべてわが憎むことなればなり、と主云い給う。一八万軍の主の御言、また我に下れり、曰く、一九万軍の主かく云

6)争い
を調停するための裁判。

二〇

二二

い給う、第四月の断食、第五月の断食、第七月の断食、及び第十月の
 断食は、ユダの家にとりて、歡喜となり愉悦となり、嘉節たるべし。^ア
 ただ汝等眞実と平和とを愛せよ。二〇万軍の主かく云い給う、民来りて
 多くの都市に住まい、ニその住民互に他を訪れて、「いざ我等行き
 て主の御面前に祈願をこめ、万軍の主を求める」という時至らば、我
 もまた行かん。ニ数多の民、強き国人、イエルサレムにて万軍の主を
 もとめ、主の御面前に祈願をこめんとて来るべし。ニ万軍の主かく云い
 給う、その日には種々の異国語の者十人、^ア手を伸べてユデア人一人
 の裾を捉え、「我等汝等と共に行かん、蓋は我等、天主汝等と共に在
 すと聞きたればなり。」と云わん。^ア

(ア)イエルサレムの復興でこれから毎日断食する理由がなくなつたから、80という数は多数を意味する。
 (ア)メシアの時代には、異教徒も救いがユデア人から来ることを悟るだろ
 う。約四・二二参考照。

第九章

メシアの平和時代の曙

一 ハドラクリの地と、その止まる所ダマスコに対する

第九章

1)ダマスコの北方にある

主の重荷。²⁾ そは主の御目、人々とイスラエル諸族との上にあればなり。ニこれ³⁾に界するエマト、及びチロとシドンとに対しても然り、實に是等は甚だ賢しと自負し居ればなり。ニチロは己が為に砦を築き、銀を土の如く、金を巷の泥の如くに積めり。四視よ、主これを乗取り、その城を海に打ち落し給わん、町そのものは火に焼き尽さるべし。

五 アスカラロンは見て怖れ、ガザもまた然なして、太く悲しまん。アッカロンも、その希望破れたるに由りて然り。ガザの王は滅び、アスカラロンは住む人なきに至るべし。六アゾトには侮られたる者座を構えん、我フイリスト人等の誇を打破すべし。七我その口より血を、⁴⁾その歯の間より憎むべき物を、⁵⁾取り去らん。是さえも遺りて我等の天主に帰依し、ユダの侯の如くになり、アッカラロンはイエブス人の如くになるべし。八我わが為に往きつ復りつして戦う者等を、わが家の周囲に置かん、最早暴虐者の彼等を襲うことあらじ、そは我今わが目もて見るべし。

おわかれらの最もに最早暴虐者の彼等を襲うことあらじ、そは我今わが目もて見るべし。

アラメア人の一小国の首都。一²⁾預言書によく出でくる如く、禍の預言。賽一三・一など參照。一³⁾ダマスコ。
4)異教徒は血をしほらずに犠牲を神々に獻げ、後それを食べた。一⁵⁾偶像の供物。一⁶⁾曾てイエブス人がダヴィードの国に入つたように、異邦人は淨められた後天主の御国に入れられるだろう。

たればなり。7) 娘シオンよ、飽くまで喜び躍れ、娘イエルサレムよ、歎び呼べ。視よ、汝の王、8) 義しくして救濟を施す者、汝の許に来らんとす。彼は貧しくして、9) 驢馬、即ち牝驢馬の仔なる駒に乗るなり。10) 10) 我エフライムより戦車を、イエルサレムより馬を、滅ぼし去らん。戦争の弓も折り棄てらるべし。彼異邦人等に平和を説き給わん、その権力は海より海にまで、河より地の果にまで、及ぶべし。ニ汝もまた、汝の契約の血によりて、汝の俘囚人等を、かの水なき坑より放ち出せり。11) 三汝等俘囚の身ながら希望を抱ける者よ、砦に帰れ。我今日またも告げて云う、我、二倍にして汝に報いん。12) 三それ、我わが弓としてユダを張り、エフライムを之に番えたり。13) シオンよ、我汝の子等を起し、ギリシャよ、汝の子等に向かわしめん。しかして我汝を勇士の剣の如くなすべし。14) 一四主なる天

7) 彼らを保護して。
8) ダヴィードの王位の後継者、待望されること久しい無上の王、メシア。

9) この王の建てる国が靈的のものであることを全く疑いなくするためには。

10) この予言が文字通り成就したことは、マテオ二一一以下。可一一・一以下。路一九・二九以下。

約一二・一二以下参照。
11) 呼び戻した。12) 異郷にあつて苦しんだのに対し。

13) 即ち矢として。
14) ここではまずマカベオ人の戦いをさす。

主、彼等の上に現れ給わん、その矢電光の如く出でべし、主なる天主、喇叭を吹き鳴らし、南の旋風に乗りて進み給わん。

一五 万軍の主、彼等を護り給うべし、彼等啖いては、投石器の石

もて征服え、飲みては、葡萄酒によるが如くに醉わん。かくて彼等、鉢の如く、また祭壇の角⁽¹⁵⁾の如くに満たさるべし。一六その日には⁽¹⁶⁾主彼等の天主、彼等を御民の群として救い給わん、そは聖なる石⁽¹⁷⁾、御國の上に挙げらるべきなり。一七そもそもその幸は何ぞや、その美わしきは何ぞや、選抜の人々の小麦と、処女等を生ぜしむる葡萄酒とに他ならず。⁽¹⁸⁾

⁽¹⁵⁾これには燔祭を獻げる時血をふりかけた。
⁽¹⁶⁾勝利の日には。
⁽¹⁷⁾冠の宝石。
⁽¹⁸⁾若い人々を始めとして彼らが要する飲食物には、小麦や葡萄酒が溢れるほどあるだろう。転義としては、これは聖体に適用される。

第十章

天主に逆らう者に対する善人の勝利——散在せる御民の救い

一 汝等晩き季に、雨を主に乞い求めよ、主は雪⁽¹⁹⁾を造り、人々に多くの雨を与え、田圃にある草の各々にも及ぼし給わん。

第十章 1) ヘブレオ語本
は「電光」。即ち雨をもたらすべき雷雲。

二

ニそれ、偶像は益もなき事を告げ、降神者は虚偽を見、夢ト者は空しき事を語れり、彼等の慰めし所は徒なりしなり。この故に人々は羊群の如くに迷わされたり、しかも牧者なきが故に惱むべし。^三わが忿怒、牧者等に対して火と燃えたり、我牡山羊等を懲らさん、²⁾ 実に万軍の主、その群なるユダの家を眷みて、彼等を戦闘におけるその榮ある馬の如くなし給えり。^四隅石も彼より、天幕の棧も彼より、戦争の弓も彼より、すべての暴虐者も同じく彼より出べし。^五彼等戦闘に臨みては、道の泥³⁾を蹂躪る勇士の如くなり、天主彼等と共に在すに由りて、戦わん、馬に騎れる者等も敗れ去るべし。六我、ユダの家を強くし、ヨゼフの家を救い、彼等を連れ帰らん、そは我彼等を憐まんとすればなり。彼等は我が彼等を棄てし時然りし如くなるべし、實に我は主、彼等の天主なれば、彼等に応えん。七またエフライムの人々は、勇士の如くにして、葡萄酒を飲みたる如く、その心愉しむべし。彼等の子等は見て愉しみ、その心主によりて歎び躍らん。八我彼等に向かい口笛

タ原語
visitabo

「訪れん」

この語には二通りの意味がある。即ち悪人を罰すると善人に恵みを与えると。

3)敵を泥

のよう

2) ヴルガ

を吹きて之を集めん、そは我彼等を贖いたればなり。我彼等をば、そ
の裏に多かりしが如くに、多くせん。我彼等を諸民の中に播かん。

彼等は遠方にありて我を心に留め、その子等と共に生存えて帰り来る。

べし。○我エジプトの地より彼等を伴い帰り、アッシリニア人の間より

彼等を集め、ガラードトリバノンとの地に彼等を伴い行かん。彼等を

容るる余地なきに至るべし。○二彼、海峡を渡り、海に立つ波涛を打

ち給わん、河の淵は悉く辱しめられ、アッシリニアの驕慢は卑うせら

れ、エジプトの王笏は離れ去るべし。ニ我彼等を主によりて強くせん、彼等はその御名によりて歩むべし、と主云い給う。

第十章

悪しき牧者に対するいましめと善き牧者即ちメシアに対する呼びかけ

一 リバノンよ、汝の門を開き、火をして汝の杉を焼き尽さしめよ。

二 樅よ、汝泣号べ、そは杉倒れ、見事なる樹木枯れだればなり。バ

4)彼らの以前の領地がもう狭くなつて。——5)出一四・二一。一五・八を暗示。——6)天主のみ旨に従つて。

第十一章 リバノンは言わばイスラエル国に至る門。

三

サンの櫻よ、汝等泣き号べ、そは木深き森も伐り倒されたればなり。三牧

2) 豊かな牧場
3) 森。——4) 牧

者等の叫ぶ声す、そは彼等の榮²⁾蹊蹠られたればなり、獅子等の咆ゆる声す、そはヨルダンの誇³⁾蹊蹠られたればなり。四わが天主にて在す主、かく云い給う、屠るべき羊群⁴⁾を牧せよ。五これを有てる者は、屠りて更に悔い⁵⁾ず、売りては云いぬ、主は祝すべきかな、我等富みたり、と。その牧者等⁵⁾もこれを惜しまざりき。六主云い給う、我最早この地の住民を惜しまじ。視よ、我この人々を各々その隣人の手に渡し、またその王の手に渡さん。彼等この地を荒らすべし、されど我之を彼等の手より救い出さじ。

5) 五節にある
買手、売手、
及び悪しき牧者。

く云い給う、屠るべき羊群⁴⁾を牧せよ。五これを有てる者は、屠りて更に悔い⁵⁾ず、売りては云いぬ、主は祝すべきかな、我等富みたり、と。その牧者等⁵⁾もこれを惜しまざりき。六主云い給う、我最早この地の住民を惜しまじ。視よ、我この人々を各々その隣人の手に渡し、またその王の手に渡さん。彼等この地を荒らすべし、されど我之を彼等の手より救い出さじ。

5) 五節にある
買手、売手、
及び悪しき牧者。

く云い給う、屠るべき羊群⁴⁾を牧せよ。五これを有てる者は、屠りて更に悔い⁵⁾ず、売りては云いぬ、主は祝すべきかな、我等富みたり、と。その牧者等⁵⁾もこれを惜しまざりき。六主云い給う、我最早この地の住民を惜しまじ。視よ、我この人々を各々その隣人の手に渡し、またその王の手に渡さん。彼等この地を荒らすべし、されど我之を彼等の手より救い出さじ。

5) 五節にある
買手、売手、
及び悪しき牧者。

七汝等、羊群の中にて憐なる者よ、我この為に屠らるべき羊群を牧せんとする。我二本の杖を取り、一を「美」と呼び、他の一つを「絆」⁶⁾と呼びてす。我二本の杖を取り、一を「美」と呼び、他の一つを「絆」⁶⁾と呼びて

7) 五節にある
買手、売手、
及び悪しき牧者。

その羊群を牧せり。八我一月の中に三人の牧者⁷⁾を絶やせり。わが心彼等によりて痛みぬ、蓋は彼等の心も我に対して変りたればなり。九我云いけらく、我は汝等を牧せじ。死する者は死し、絶ゆる者は絶え、残る者は各

7) 五節にある
買手、売手、
及び悪しき牧者。

九 八 七 六 五 四 三

○ 二 一 一 二 三 一 四 一 五 一 六 一 七

各々その隣人の肉を喰えかし。一〇我「美」と称ぶ杖を取りて、之を折りしが、それは諸民と結びしわが契約を、解除せん為なりき。二これはその日に解除せられたり、かくて羊群の中の、わが命を守る憐なる⁸⁾者は、それが主の御言なることを曉れり。二我彼等に云いけらく、もし汝等の目に善しと見えなば、わが報酬と酬を我に持ち来れ、もし然らずば、やめよ、と。是において彼等、わが報酬として銀三十枚を量れり。二主我に曰いけるは、我が彼等に評価せられし善き¹⁰⁾価を、陶器師に投げ与えよ、と。よりて我その銀三十枚を取り、之を主の家に投げ入れて、陶器師に与えたり。一一我また「絆」と称ぶわが一本目の杖を折りしが、そはユダとイスラエルとの間の兄弟の縁を断たん為なりき。一五主なお我に曰いけるは、汝また愚なる牧者の道具を取れ。一六そは視よ、我地に一人の牧者を起さんとすればなり。彼は棄てられたる者を顧みず、散り失せたるものを探さず、傷つきたる者を癒さず、なお立つに堪うる者を養わず、肥えたる者の肉を食し、その蹄を裂くべし。一七その羊群を棄つる牧者よ、偶像よ、剣そ

8) 虐げ
9) 当時
この価で奴隸が一人買えた
10) 皮肉。
11) マテ
オ二七
・五以下参考

の腕に、またその右の目に下らん、¹²⁾ その腕は萎えて枯れ、その右の目は冥みて潰るべし。

第十二章

天主メシアの御国を迫害者の手より護り給わん

一　イスラエルに關する主の御言の重荷。¹⁾ 天を展べ、地の基を据え、人の靈をその中に形成り給う主、かく云い給う、²⁾ 視よ、我イエルサレム²⁾ を周囲のすべての民のよろめき倒るる門³⁾ となさん。ユダもまたイエルサレムに対する包囲の裡にあるべし。⁴⁾ 三しかしてかくなるべし、その日には我イエルサレムをして、すべての民の力石⁵⁾ とならしめん。之を持ちあげんとする者は皆肉破れ重傷^{じゆうしよう} を負うべし。されど地上の國々悉く相集

第十二章 ¹⁾本九・一参照。 ²⁾ザカリアはここでメシアの時代の天主の御国のことと言っているのである。 ³⁾この門に触れる敵はよろめいて後に倒れるだろう。 ⁴⁾天主の御国はおのが国民にさえ攻撃されるだろう、例えは異端者などによつて。ヘブレオ語本「ユダもまた共に攻めらるべし」。 ⁵⁾持ちあがるか、どれほど高くさしあげられるか、力をためす石。

¹²⁾腕は羊群を導かなかつたから打たれ、目は羊群を見なかつたから見えなくなる

まりて之を攻めん。四主云い給う、その日には我打ちていすれの馬をも駆かし、
 その騎手を狂わしめん。しかして我ユダの家に對しわが目を障き、⁶⁾ 諸民の馬
 を悉く打ちて盲目となすべし。五ユダの諸侯はその心の中にて云わん、イエル
 サレムに住む者は、わがために万軍の主たるその天主により、強められよか
 し、と。六その日には我ユダの諸侯を薪の中なる火の窯の如く、また乾草の中
 なる松明の如くにせん、彼等右にも左にも向かいて、周囲の民を悉く焼き滅ぼ
 さん、かくてイエルサレムには再び人住み、イエルサレムは己が処にあるべ
 し。七主は旧の如くにユダの幕屋を救い給わん、これダヴィードの家が大いに誇
 し、イエルサレムの住民の榮がユダに対して傲ることのなからん為なり。八そ
 の日には主イエルサレムの住民を護り給わん。彼等の中の躓きたる者もその日
 にはダヴィードの如くなり、ダヴィードの家は天主の家の如く、彼等の眼前なる主
 の使の如くなるべし。九その日には我イエルサレムに來り寇する国民を悉く滅
 ぼすことを図らん。一〇我ダヴィードの家とイエルサレムの住民との上に、恩寵と

6)見守
 るため
 本九・
 八参照
 7)国を
 救つた
 のが自
 分達だ
 と誇る
 ことが
 できな
 い。

祈禱との靈を注がん。彼等はその刺し貫きたる⁸⁾我を仰ぎ見、独子の為に嘆く如くこれが為に嘆き、初兒の死に當りて悲しむ慣の如くこれが為に悲しむべし。二その日にはマゲッドンの野にあるアダドレンモ

8) 羊群が牧者を虐待する。—9) 代下
王下二三・三〇。
10) 母下五・一四参考。

ンの嘆きの如き大なる嘆き、イエルサレムにあらん。—11) 国は、族々に別れて嘆くべし、即ちダヴィドの家の族別れ、その妻等別れ、一ナタ¹⁰⁾の家の族別れ、その妻等別れ、一タ¹¹⁾の家の族別れ、その妻等別れ、一レヴィの家の族別れ、その妻等別れ、一ナ族もみな、族々に別れ、その妻等も別れて然すべし。

一四 一三 二二

第十三章

偶像礼拝及び偽預言の絶滅——メシアの群の淨化

一その日にはダヴィドの家とイエルサレムの住民とに、一つの泉開かれん、是は罪人や不淨の女を洗う為なり。一万軍の主云い給う、その日にはまた、我偶像の名を地より抹殺せん、最早その思い出ださる

1) 教会
においてこれは洗礼の水によつて実現されている。

ることなかるべし。我更に偽預言者等や不淨の靈をも、地より除き去らん。²⁾ またかくあるべし、人ありてもしなおも預言せんか、これを生みなしたるその父その母、これに云うべし、汝は生くべからず、そは汝主の御名によりて虚偽を語りたればなり、と。かくても彼預言したらん時は、生みの親なるその父その母之を刺さん。³⁾ しかしてかくなるべし、その日には預言者等々預言せんか、その見し幻によりて恥を蒙るべし。また他を欺くために粗麻布の衣を身に纏うことあらじ。⁴⁾ 却つて彼は云わん、我は預言者にあらずして、畑作る者なり。實にアダムはわが若き時よりして、わが龜鑑なりき、⁵⁾ と。六時に人々彼に向かいて、汝の両手の中央にある、その傷は何なるか、と云わんか、彼は云うべし、是等の傷は我を愛せる人々の家にて受けしなり、⁶⁾ と。七万軍の主云い給う、⁷⁾ 剣よ、起きてわが牧者⁸⁾ と我に附ける人々とに向かえ。牧者を討て、さらばその羊散々にならん、我小さき者にわが手を向くべし。八主云い給う、

²⁾ メシアの救いの時代には、偶像礼拝や偽予言がなくなるだろう。³⁾ アダムは天主から土を耕す義務を負わされた。⁴⁾ 友人と争いで。また三節のよう人に両親からも。いずれにしてもこの箇所はメシアをささないが典礼上はこの言葉を主に適用する。⁵⁾ メシア。

人々全國において、その三分の一は散々になりて亡び、三分の一はその中
に残らん。我その三分の一を火の中に差し入れ、銀を吹き分くる如く之
を吹き分け、金を驗す如く之を驗すべし。⁶⁾ 彼等わが名を呼ばんに我これ
に応うべし、我「汝はわが民なり」と云わんに、彼等「主はわが天主な
り」と云うべし。

第十四章

メシアの御国は迫害を受けし後大いに榮えん

一視よ、汝の獲物¹⁾ 汝の中に分たるべき主の日来らん。二我万國の民を
イエルサレムに集めて、之を攻めしめん。都市は取られ、家は荒らされ、
女は辱²⁾しめられ、都市の半は捕虜となりて行くべし。されど民の残余は邑
より除かるることあらじ。三その時主出陣して、戦鬪の日に戦い給いし如
く、四その國々の民を攻め給うべし。その日には彼の御足、イエルサレム
に向かいて東の方にある橄欖山³⁾の上に立たん。橄欖山はその中央より東西
八九七

⁶⁾ 救われた人々も驗しを受けずにはすまない。

第十四章 1) 汝

から奪い取られた物。

2) 例えばエジプトを出た時及びカナアンに入つた時のようす。

に裂けて、甚だ大なる裂罅を作り、その山の半は北に、半は南に別るべし。

^五汝等はこれらの山の谷に逃げ入らん、この山々の谷は合して、全く相接するに至るべし。汝等は曾てユダの王オジアの時代に、地震を避けて逃げしが如く、逃げ去らん、主わが天主、諸々の聖人を伴いて來り給うべし。^六その日にはかくなるべし、光なく、ただ寒氣と冷氣とあらん。時に主のみ知り給う昼にもあらず夜にもあらざる、一つの日あるべし、しかして暮時に及びて光あらん。八その日にはかくなるべし、活ける水イエルサレムより出で、

その半は東の海⁴⁾に、半は最極の海⁵⁾に至らん。これは夏にも冬にもあるべし。⁶⁾九主、全地を治むる王となり給わん。その日には、ただ主一つ、その御名一つあるのみとなるべし。⁷⁾全地は荒野に至るまで、レンモンの丘よりイエルサレムの南の地まで旧の状に帰らん。そはり高くなりて旧の処に住まり、ベンヤミンの門より前に門のありし処に至り、隅の門に達し、ハナネールの塔より王の酒搾場にまで及ぶべし。ニその中には人々住まん、最早呪詛い

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

3) どれほ

どひどい

患難の時

にも、天

主は善人

に救いの

機会を与

え給うだ

ろう。

一三
あらじ、かくてイエルサレムは安らかに坐すべし。ニ主シムが降クダして以モて、イ
エルサレムを攻めたる諸國の民シヨコクタミを打ち給タモうべき、災厄カキヤイは次の如くならん、
即ち彼等己オノが足にて立てる間に、各々肉腐オノオノニククり、目その窩オナの中にて腐クキり、舌シタ
その口クチの中にて腐クキるべし。⁸⁾ 一四その日には主シムによりて、彼等カキラの中に大なる
混乱起クンランオトらん。人隣人ヒトドリヒトの手ハンドを執ヒテり、その手隣人ヒトドリヒトの手ハンドに握ヒキり締めらるべし。

一四ユダさえも、イエルサレムを敵テキとして戦タタカわん。⁹⁾ 周囲のすべての国民クニタミの
財貨タカラは、金銀衣服キンギンイフ等エタ、極めて多く集アツめらるべし。一五また馬ウマ、驥馬ラバ、駱駝ラクダ、
驢馬ロバ、及びその陣營ジンエイにあるすべての畜ケモノの滅ぼさるるも、かの滅ぼさるる如コト
くならん。一六イエルサレムに來り寇アダしたる諸國の民シヨコクタミにして残れる者は、皆ミナ
王たる万軍の主シムを拝み、幕屋マツヤの祭マツリ¹⁰⁾を守らんとて、年毎に上り来るべし。

一七しかしてかくならん、地の諸族シヨコクの中に、王たる万軍の主シムを拝まんとて、
イエルサレムに上り來らざる者あらんか、その上ノボには雨アメ降ることあらじ。

一八即ちエジプトの族ヤカラもし上ノボらず來らば、その上ノボには雨アメなからん。剩アマツサえそは、

8) 恐ろしい疫病が人畜を襲うだろう。原爆の惨禍などを想起させられる。— 9) 本一二・二参照
10) 幕屋祭は荒野における天主の御導きと收穫とに對する感謝祭。

一九

主しゅが幕屋まくやの祭まつりを守まもりに上のぼらんとせざるすべての國民くにたみを打ち給うたまうべき、その災厄わきわいを蒙こうむるべし。一九エジプトの罪ざい、及び幕屋まくやの祭まつりを守まもりに上のぼらんとせざるすべての國民くにたみの罰ばつは、かくの如ごとくならん。二〇その日ひには、馬うまの轡くつわに付つきたるものまで、聖とうき物ものとして主しゅに献ささげられ、二一主しゅの家いえにある鍋なべは、祭壇さいだんの前の鉢まさの如ごとくなるべし。二イエルサレム、及びユダにある鍋なべは悉はぢく、万軍ばんぐんの主しゅにとりて聖とうき物ものとならん。¹²⁾凡すべて犧牲ささを獻いけにえぐる者は、來きたりて之これを取り、その中なかに入いれて煮にるべし。しかしてその日ひには最早もはや、万軍ばんぐんの主しゅの家いえに商あきないする者もの¹³⁾あらざるべし。

¹¹⁾旧約時代には大司祭が、「主に聖あれ」と記した冠を戴いていた。新約時代にはすべての物が一曾てはレビイ族の規定で不淨な獸とされていた馬さえも「聖なるものとなる。」¹²⁾かくの如くレビイ族の淨不淨の規定は撤廃されるだろう。¹³⁾ヘブレオ語本「カナアン人」。異邦人を意味す。